序章にかえて――

２０２２年7月19日午後5時。

新型コロナウイルス禍がまだしばらく続く様相を呈していた。筆者はＪＲ渋谷駅近くのドラッグストアで購入した検査キットによる陰性証明を撮影した画面をスマートフォンに保存し、東京・赤坂のホテルへと向かった。

この日、フィギュアスケート男子で２０１４年ソチ、18年平昌両オリンピックで金メダルを獲得した羽生結弦さんの記者会見が予定されていたからだ。それは、とても大きな決断の表明になる――。そのことも覚悟できていた。

さかのぼること約5カ月前、羽生さんは3度目の大舞台となった北京冬季五輪（以下、北京五輪）に出場し、フリーでは世界で誰も跳んだことがない4回転アクセル（4回転半ジャンプ）を国際スケート連盟（ＩＳＵ）から初めて「技」として認定を受けた。

ショートプログラムでは、冒頭の4回転サルコウを跳ぶ直前、ほかの選手によって滑走前にすでにできていた氷の穴にスケート靴のエッジがはまるアクシデントに見舞われた。

このため、8位スタートとなってしまった。

しかし、フリーでは、コロナ禍が影を落とす世界の空気を切り裂くように、高さのある4回転アクセルに果敢に挑戦。完璧な成功とはいかなかったが、スケート史に新たな歴史を刻んだ。ショートの不運も影響したことで、残念ながら五輪3連覇には届かなかった。

それでも、「報われない努力だったかもしれない」という本人の言葉とは対照的に、多くのファンが勇気と感動をもらったジャンプだった。

五輪連覇後の「最大のモチベーション」と明言してきた4回転アクセルを、五輪本番で跳ぶという果実を手にしている。

そんな羽生さんが、五輪の翌シーズンに向けてどんな決断を下すのかは、北京五輪後からずっと、フィギュア界にとどまらず日本中の関心事となっていた。

会見前日の7月18日、羽生さんは所属事務所を通して報道各社に「決意表明の場として記者会見を開催いたします」と記したプレスリリースを送付した。

そこには、羽生さんが自らの言葉で今後について表明するという意思表示が記されていた。事前告知は、メディアへの配慮だったことは明白だった。

憶測による「フライング記事」を避けたければ、会見数時間前など直前のリリースで事

足りたはずだった。羽生さんほどの存在であれば、仮に1時間前に会見をアナウンスしても大勢の報道陣が駆けつけただろう。

「新たなシーズンも現役を続けるのではないだろうか」

「4回転アクセルに続く新たなモチベーションが生まれてはいないだろうか」

こうした期待を抱く声がたくさんある一方で、羽生さんを取材してきた多くの「番記者（担当記者）」は、「もしかしたら羽生さんが大きな決断を下して会見を開くことになったのではないか」という覚悟を抱かざるを得ない状況でもあった。

記者は、どんな会見になったとしても、対応できる記事を書かなければならない。

関心を抱いているファンや読者に内容を伝える使命があるからだ。このため、「決意表明」の中身が進退のどちらになってもいいように準備をする必要があった。

事前告知によって羽生さんがくれた時間を使い、これまでの羽生さんの競技人生を振り返ることができた。

◇

筆者は、羽生さんが記者会見を開いた当時も含めて、２０２３年3月まで産経新聞に在籍する運動部の記者だった。05年からスポーツ報道に携わり、フィギュアスケートを担当することになったのは、10年バンクーバー五輪翌年の11–12年シーズンからだった。

大変恐縮ではあるが、本書に目を通してもらう前提として、筆者の経歴を簡単に振り返っておきたい。01年から新聞記者となり、その後の大半をスポーツ報道に身を置いてきた。プロ野球、米大リーグなど野球取材に多くの時間を費やし、11年からは初めて五輪競技に軸足を移すことになった。そこからフィギュアスケートの取材をスタートさせていくのであるが、正直に打ち明ければ、恥ずかしながら当初はフィギュアスケートのジャンプが6種類あることさえも知らなかった。

担当になった当時の日本国内におけるフィギュアスケートの報道は、まだまだ女子選手が中心だった。06年トリノ五輪で荒川静香さんが男女を通じて日本初の金メダルを獲得し、その後も浅田真央さんや安藤美姫さん、鈴木明子さんたちが世界のトップを争っていた。

男子は高橋大輔さんがバンクーバー五輪で銅メダルを獲得し、織田信成さんや小塚崇彦さんたちが世界の頂点を目指してしのぎを削っていた。未来に五輪連覇という大きな偉業を成し遂げることになる羽生さんの取材をスタートさせた当時はそんな状況だった。

担当になる少し前の２０１１年3月11日に未曽有の東日本大震災が発生し、東北地方を

中心に多くの犠牲者が出た。被災地はいまなお、復興途上にある。そして、羽生さんも被災者の一人だったことをのちに知った。

練習中のリンクで被災し、家族4人で避難所生活を余儀なくされた。時間が経過したあとの取材で「スケートどころではなかった」という心境を明かしてくれた。

そんな羽生さんの「魂の滑り」を見たことが、私にとってはフィギュアスケートに魅了された大きな転機となった。

2012年フランス・ニース。フィギュアスケートでは初の海外出張となった現地で、羽生さんが初出場した世界選手権で迫真の演技を見た。

まだシニアに上がって2シーズン目だった羽生さんは、体力を限界まで振り絞ってフリー『ロミオとジュリエット』を熱演した。スタミナも切れかけた演技終盤のステップに入る直前、雄叫びを上げて激しい表情で滑る姿を、記者席から身を乗り出すようにして見た。

この羽生さんのフリーは鮮明な記憶として、いまなお脳裏に焼き付いている。実際、あの大会で羽生さんに魅了されたというファンは多い。

当時の羽生さんは、まだ新星という位置付けだったが、スケート関係者からは「彼は間違いなくソチ五輪に出る。そして金メダルを獲ることができる選手だ」と言われた。羽生さんがのちに「ソチと次のオリンピック（平昌）で2連覇する」という目標を掲げていたことは、まだ知らなかったが、この大会を機に取材対象としてマークしておかなければいけない選手だと名前を刻みつけた。

その後の羽生さんの成長曲線はすさまじく、「五輪連覇」を有言実行で果たし、栄光の道を駆け上がっていった。

ソチ五輪シーズンは全日本選手権で連覇を果たし、五輪の団体戦のショートでいきなり高得点をマーク。勢いに乗った個人戦のショートで史上初となる大台超えの101・45点をたたき出した。もちろん、当時の世界歴代最高得点である。

世界選手権3連覇中だったカナダのパトリック・チャン選手との熾烈な戦いを制して、史上2番目の若さである19歳69日で金メダルを獲得すると、成長曲線はさらに鋭角に伸び続けた。

史上初の4回転ループ成功、さらには大会に出るたびに塗り替えたショート、フリー、合計での世界歴代最高得点、そしてスコアだけでは言い表わすことができない圧倒的な存在感……。羽生さんは「絶対王者」と呼ばれるようになっていった。

一方で、何度もケガに見舞われ、シーズン中に手術も経験している。右足首の負傷明けに一度も実戦を挟まず、「ぶっつけ本番」で平昌五輪に出場し、それでも連覇を果たした圧巻の復活劇は、個人では最年少（23歳）での国民栄誉賞へと導かれた。

ソチ五輪から平昌五輪までの4年間で、男子スケーターの存在感は一気に高まった。羽生さんがプロに転向した現在もなお、フィギュアスケート人気の中心が男子にあることも含め、羽生さんの競技への功績はとても大きい。

メディアは一括りにされることが多いが、テレビ、ラジオ、新聞、専門誌、一般雑誌など多岐にわたる。

新聞も、筆者が在籍していた産経新聞のような一般紙（朝日や読売、毎日、日経など）と、スポーツ紙（日刊スポーツ、スポーツニッポン、スポーツ報知、デイリースポーツ、サンケイスポーツなど）に分かれる。

一般紙は政治や経済、海外ニュース、さらには社会ネタや文化などに関する記事も扱うため、スポーツに関するニュースが一面を飾ることは珍しい。そんな慣例を打ち破ったのも、羽生さんの高い注目度だった。スポーツ紙関係者によると、即売部数を変動させるほどの影響力があったという。

羽生さんに対する世間の関心が高まる中、ソチ五輪前から取材をしてきた記者に加え、新たにたくさんの記者がフィギュア担当として取材現場に来るようになった。

日本を飛び越え、世界からも注目される羽生さんの取材は責任感が伴い、大変だったが、とても充実した時間でもあった。

ぜんそくの持病がある羽生さんは、新型コロナウイルス禍での感染リスクを考慮して、20－21年シーズンのグランプリ（GP）シリーズ参戦を回避しなければならなくなった。紆余曲折を経てたどり着いた北京五輪の舞台で、羽生さんが挑んだ4回転アクセルは誰もが固唾をのんで見守った。

◇

冒頭の会見に話を戻すと、羽生さんの決意の会見はこうした背景の中で行なわれたのだった。まばゆいカメラのフラッシュを浴び、笑顔の羽生さんはプロ転向を宣言した。引退の二文字は決して使わなかった。羽生さんらしかった。

会見の詳細は後述するが、羽生さんはアスリート、フィギュアスケーターの「第2章」を自らの力で切り開いた。その後の単独公演によるアイスショーやスケーター史上初となる東京ドームでのアイスショーなどは読者のみなさんがご存じのとおりである。

◇

今回の書籍にまとめたのは、筆者が取材した２０１２年3月の世界選手権から22年2月の北京五輪までの約10年間の競技人生と、その後にプロとして進化を続けた約1年の日々である。

筆者が現地で試合を見たり、羽生さん自身にインタビューを受けてもらったり、スケート関係者を取材した約４０００日間のメモと記録をまとめた。

山と溪谷社が発行するフィギュアスケート専門誌『Quadruple Axel』の村尾竜哉編集長から、「番記者が羽生さんをどう見てきたか。田中さんが羽生さんを取材してきた年月を本にしてみませんか」と声をかけてもらったときは、嬉しさと不安が交錯した。当たり前のことであるが、筆者が見た羽生さんは羽生さんの一部でしかないからだ。

本書では現場に足を運んだり、羽生さんや周囲の人たちへの取材を通じたりして、知り得たことを偽りなく、書き綴ったつもりである。長らく取材をしてきた筆者の見てきた羽生さんの「肖像」が、本書を手に取ってくれた読者のみなさんにとって、羽生さんの新たな魅力の発見につながれば、これほど光栄なことはない。

◇

余談にはなるが、新聞記者の世界には「予定稿」という原稿が存在する。

フィギュアスケートの注目度が高くなるにつれて、テレビ中継はゴールデンタイムと呼ばれる夜の午後9時前後になってきた。海外で行なわれる国際大会は時差の都合で日本時間の深夜開催となることもある。翌日の朝刊に間に合わせるためには、記事を入稿しておかなければならない。演技を見たら、できるだけ早く出稿できるように記者があらかじめ、事前の取材メモなどで作っておく記事を「予定稿」と呼ぶ。

羽生さんは、ある意味で記者泣かせのアスリートだった。演技後のわずか数分の取材時間であっても、発する言葉や語られるエピソードのインパクトが強すぎて、予定稿が吹き飛んでしまうからだ。

メッセージ性の強い生きたコメントやエピソードを盛り込まなければ、翌朝の新聞を目にする読者に失礼にあたる。だから、ミックスゾーンと呼ばれるリンク脇のスペースで取材が終わると、番記者たちは息を切らしながら記者席に戻って、パソコンのキーボードをたたく。なんとか締め切りに間に合わせた瞬間、私や他紙の記者たちは疲労困憊している。しかし、どこか心地よい充実感も漂う。

夜のスポーツニュースで羽生さんの演技内容や結果をすでに知っている読者に、プラス

αで何を届けることができるか。新聞記者は日々、そのことと戦っている。羽生さんは、そんな記者に期待以上の取材成果をもたらしてくれた。

いい話が聞けた。いい記事が書けた。だからこそ、疲れも吹き飛んだ。そして、羽生さんの記事はいつも破格の扱いで紙面に掲載される。前述したとおり、スポーツ紙であれば一面トップ、一般紙と呼ばれる新聞でも必ずと言っていいほど一面で結果が紹介される。

破格というのはあくまで新聞の中の話であり、読者からすれば当然の扱いでもある。羽生さんはそれだけの存在感を持っているからだ。

スポーツ報道に長く携わった立場から、一つの持論がある。「アスリートは、記者を育てる」ということである。

筆者よりも30歳近く年配の先輩記者たちは、プロ野球界の往年のスーパースターである巨人の長嶋茂雄さんや王貞治さんの現役時代を取材した日々をまるで昨日のように楽しそうに振り返る。メジャーリーガーとなった松井秀喜さんやイチローさん、松坂大輔さんたちを取材した同僚記者たちも同様だ。

野球に限らず、サッカー日本代表や五輪競技にもこうしたアスリートはいる。そして、筆者を含めたここ10年ほどのフィギュアスケート担当記者はまさに、羽生さんに育てても

らった世代の記者である。

読者離れ、メディア離れが言われて久しい時代である。それぞれの報道機関はテレビも新聞もその他の媒体も決められた経費の中でしか取材はできない。予算は削減の一途をたどっている。自らが担当する競技に注目が集まらなければ、海外取材はできない。五輪本番で発行されるメディアパスも他競技を担当する記者に譲らなければならなくなる。

しかし、羽生さんが3度の五輪に出場した年月、フィギュアスケートの担当記者、カメラマンは常に恵まれた環境で取材することができた。そして、大きな大会を取材する経験を積むことで、記者としての地力も培うことができた。

偉大なアスリートと巡り合うことができるかは、運に委ねられている。信じられないような幸運を手にした羽生さんの番記者が、取材というフィルターを通して見た等身大の「羽生結弦」をぜひ、手に取って読んでもらえれば幸いである。

※スポーツ報道では、アスリートの敬称を略することが一般的であるが、本書では現役時代の肩書は「選手」、引退後は「氏」あるいは「さん」を呼称とした。